

## 論文要旨

### 学位論文題目

冷戦初期における日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験——ジェンダーとエスニシティの視座から——

氏名 臺丸谷美幸

本稿は朝鮮戦争（1950-1953 年）へ従軍した日系アメリカ人、とりわけ日系二世についての考察である。「日系二世」とは、アメリカ合衆国生まれの移民第二世代を指す。本稿では西海岸地域のカリフォルニア州出身者の事例を考察する。本稿は朝鮮戦争へ従軍した日系二世たちとは、冷戦初期当時のアメリカにおいていかなる社会的役割を与えられていたのかを明らかにするものである。この問いに対する本稿の仮説は、朝鮮戦争期の二世兵士とは「冷戦の兵士」(the Cold War soldier)としての社会的役割を果たしていたというものである。これはすなわち、朝鮮戦争期の二世兵士は「反共の担い手」であると同時に、冷戦初期アメリカが「リベラル」であり、人種平等社会を実現していることを喧伝するため、彼らが人種統合の象徴として「徴用」されていたという解釈である。

これまでの二世兵士に関する先行研究では、第二次世界大戦期における、日系人による人種隔離部隊にのみ焦点が当たり、人種混合部隊で戦った朝鮮戦争期における二世兵士については、ほとんど検討されてこなかった。しかし、朝鮮戦争期は重要である。朝鮮戦争は 1948 年に米軍で実施された軍備再編以後、初の「実戦」にあたるからである。1948 年 6 月、トルーマン大統領は大統領行政命令第 9981 号に署名した。この年エスニシティとジェンダーを軸とした大規模な軍備再編が行われたのである。そこで、本稿では、朝鮮戦争期の二世兵士が「冷戦の兵士」であったという仮説を検証するために、以下、三つの解明すべき課題を設置する。第一に、アメリカの大衆メディアにおいて、朝鮮戦争期の二世兵士とは「冷戦の兵士」としてどのように描かれたのか。第二に、実際に「冷戦の兵士」としての社会的役割を担った日系二世たちは、朝鮮戦争の従軍を経て「十全な市民権」(full citizenship)を獲得できたのか。第三に、二世兵士たちの「市民権」の状況とその変化には、ジェンダーの差異を認めることができるのか。またいかなる差異であるのかということである。本稿の分析視角は次の二点である。一つ目は「冷戦下の日系人」という視点である。当該時代を従来の日系人研究に従い「第二次世界大戦後」と捉えるのではなく「冷戦初期」のそれと捉えることで、朝鮮戦争期の二世兵士を冷戦の文脈から考察することが可能となる。二つ目は、エスニシティとジェンダーの視点から考察するという点である。研究方法は第一にハリウッド映画作品の表象分析、第二に従軍経験者が執筆した自伝作品の分析、第三に自伝の執筆者やその他、退役軍人へのインタビュー調査分析を行う。

第 1 章では先行研究の整理や本稿の目的、研究方法、分析視角などの基本的な手続きを行った。第 2 章では 1950 年代に製作された二つのハリウッド映画を基に、朝鮮戦争期の二世兵士像を考察した。二世兵士は朝鮮半島で戦う男性の戦闘員の姿として登場し、理想的な「マイノリティ」兵士の役割を担っていた。第 3 章では、実際に朝鮮戦争へ志願し、戦闘員経験のある二世男性、ロバート・M・ワダの事例を基に、戦闘員を経験した二世兵士の「市民権」を検討した。従軍を経てワダの「市民権」の状況が改

善したことは部分的には認められる。しかし、それは「十全な市民権」の獲得であったとは言い難いものであった。ワダは新たな「帰還兵」としての問題を抱え続けなければならなかったからである。第4章では、空軍看護部隊の一員であった二世女性、キヨ・サトウの事例から二世女性の朝鮮戦争期の従軍と日系人としての「再定住」問題を考察した。サトウは看護兵士として従軍することで、帰還後の二世女性としての「再定住」を叶えることができた。しかし、サトウが経験したように、当時の女性たちが兵士の看護という「女性らしい」任務を引き受けていくことは、結果的には次世代の女性たちが、より軍隊の中核へと接近し、女性が前線へと送られていくという軍隊におけるロジックを生み出し、強化していったのである。これは「市民権」の軍事化であると同時に、軍隊のジェンダー化と言えるだろう。

朝鮮戦争期の二世兵士は「冷戦の兵士」であった。それは当時の政府による政策や理念だけに起因して生み出された二世兵士像ではなかった。当時、「冷戦リベラリスト」たちが映画表象を通して人種平等や「リベラル」を実現しようとした結果であり、さらに実際に従軍を経験した日系二世たちによる、社会参入を目的とする行動が生み出した結果であった。

朝鮮戦争期の二世兵士像はアメリカ社会において短期間のうちに姿を消し、今日では「忘れられた」存在となっている。朝鮮戦争はアメリカ側へ明確な勝利をもたらさなかったからである。だが、実は「忘却」され「封じ込め」の対象となっていたのは、朝鮮戦争期における日系二世の存在そのものではなく、日系二世による朝鮮半島での戦闘経験であったのだと解釈ができる。なぜならば、朝鮮半島での戦闘行為という、アメリカにとって不都合な事実さえ社会が「忘却」してしまえば、愛国心と忠誠心を持った彼らは見事に、後の時代に台頭する日系人の「モデル・マイノリティ」像を、まさに体現する存在であったからだ。ここに朝鮮戦争期の二世兵士が置かれた立場の複雑さがある。ゆえに、朝鮮戦争期の二世兵士の個人的経験について検討する際には、「冷戦下の日系人」という視座から、いかに彼ら/彼女らにジェンダーとエスニシティを巡るポリティクスが働いていたのかを検討する必要があるのだ。